

「介護 & 看護EXPO」に行ってきました! どんどん技術が進化中! 介護の今をレポート

10月に幕張メッセで「第5回介護 & 看護EXPO」が開催。これからの介護を支えてくれる新しい商品やサービスがたくさん展示されていました。今回はその一部を紹介します。

電動車椅子 movBot ACE (ムーボット エース)

歩道橋も、駅の階段も、電車の乗り降りも補助者なしで、目的地へ行ける!



※会場で放映の画像から

アクセスエンジニアリングが開発した「movBot」シリーズは、従来の車椅子では難しかった走行ができる移動用ロボットです。

「ACE」は、座面を水平維持し、階段で横に移動して障害物があっても1人で上り下りできるスクモノ。アメリカ、スウェーデンの特許も取得。ほかにも、座面昇降付きで、ベッドとの移動がラクな「Nurse」などをラインナップしています。

アクセスエンジニアリング

<https://www.access-eng.com/>

ライフリズムナビ+Dr. / ライフリズムナビ+HOME

睡眠解析技術をベースにした、高齢者見守りサービス施設向けのほか、在宅介護向けの

「ライフリズムナビ+Dr.」は、睡眠解析技術をベースにしたSaaS型高齢者施設見守りサービス。センサーを活用したシステムで、エコナビスタ独自の技術による、反応の速さと誤検知の少なさが魅力です。在宅介護用に「ライフリズムナビ+HOME」もあり、東京ガスが提供。あらゆる介護現場をサポートしてくれます。



エコナビスタ <https://econavista.com/>

東京ガス <https://home.tokyo-gas.co.jp/service/liferhythmnabi-h/index.html>

歩行運動支援システム

介護施設で、お出かけ体験を再現!
みんなで気軽にレクリエーションが楽しめる



リコーテクノロジーが開発中の「歩行運動支援システム」は、テレビ画面につなげるだけで利用できる介護施設向けレクリエーションシステム。専用パッド上での足踏み運動と動画再生が連動するので、お出かけしている気分が運動不足を解消できます。複数人同時利用が可能なので、会話しながら楽しむことも。

リコーテクノロジー

<https://www.technologies.ricoh.co.jp/>

「仕事と介護の両立」でも役立つ 「遠距離介護」のアドバイス!

50代からの
人生充実計画
テーマ③:介護

「遠距離介護」は、太田さんが約25年前に出版した本のタイトルにした言葉。取材で、都会で暮らす多くの子どもが、故郷の老親の生活を応援している実態を知ったそうです。「遠距離介護を乗り切る心得11カ条」のほか、親を離れてケアする際のアドバイスを聞きました。

遠距離介護を乗り切る 心得11カ条

- 1 三歩早めにスタートし、介護予防に重点を置く
- 2 便りのないのは元気な証拠、とは限らない
- 3 ふだんの親の生活パターンを知っておく
- 4 親の暮らす地域の各種サービスの情報収集は子どもの役目
- 5 ケアマネジャーや医師には、積極的にコンタクト
- 6 親の親友、近隣の電話番号を聞いておく
- 7 育った時代背景が異なる親に、子どもの価値観を押し付けない
- 8 考えるだけでは進展なし。実行することが重要
- 9 兄弟姉妹、配偶者を味方につける努力を
- 10 世間体より親と子の笑顔が大切
- 11 無理は禁物。通う子どもの心と体の健康も大事

出典:「遠距離介護」岩波ブックレット/太田差恵子著から

これまで通りの生活を続けながら親をケア
交通費は各種割引を利用し、経費の意識で

介護というと「同居」しなればと思いがちですが、制度やサービスを活用すれば、「遠距離介護」は可能です。遠く離れて暮らしながら、親の介護を続けている人は大勢います。 「遠距離介護」では、これまでの通りの生活を送ることができ、また、離れて暮らしていいので、「互いを思いやる気持ち」を継続しやすく、優しくできるなどのメリットもあります。

最近では、同居や近居の場合でも、この考え方を取り入れる人も多くなりました。 「遠距離介護」では、やはり交通費の負担が大きくなります。航空会社では、「介護帰省割引」(名称は各社で異なる)などを用意。このほか、交通機関の各種割引サービスを利用するのも手。また、交通費も親の介護にかかる経費と捉え、負担がかさむ前に、分担方法を親や兄弟姉妹と話し合います。

「ぼっと出症候群」にならないように注意も

親が倒れ、入院介護が必要になると、医師やケアマネジャーなど、さまざまな人とともに親をサポートすることになります。その際、治療法の決断やサービスの契約などは、子どもの役割です。基本、契約や決断を第三者に「お任せ」することはできません。どうしても親が判断できない場合は、子どもが選択を迫られるので、きちんと意向を伝えましょう。

また、「お任せします」の逆で、遠距離で暮らす子どもがたまにやってくる、主治医に治療法について、本やネットで仕入れた情報をあれこれ意見を言い、現場をかき乱すことも、これを医師たちは「ぼっと出症候群」と呼ぶそうです。時には親の通院に付き添ったり、ケアマネジャーが訪問する際に同席したり、なるべくコミュニケーションを取ることも大事です。

介護サービスや施設を利用することに後ろめたさを感じる人がいます。でも、プロの力を借りることに罪悪感はない。いろんなものを利用すれば、何とかなっていくものです。



太田さん

◆NPO法人パオック
～離れて暮らす親のケアを考える会～
<http://paokko.org/about/>

